

テ落居ケリトナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔兔園小説〕^六なら茸 乞兒の賢 羅城門の札

土州眞壁郡野瓜村にての事なりし寛延四年辛未是年改元寶曆四月中百姓ども寄り合ひて、なら茸といふきのこ、大さ三四寸ばかりなる、いと美事なるを取り來て、四五人より合ひ吸物にこしらへ、酒を飲まんとせし折、同村なる不二澤幸伯といふ醫師來にければ、五人のもの申しけるは、さてさてよき處へ御出候ものかな、今日ならたけといふきのこを採り候故、吸物にして酒をたべ候なり、幸ひの折なれば御酒ひとつきこしめされよといふに、此醫師もそはよき處へ參りあはししなどいふ程に、吸物膳をもて出でければ、蓋をとりて見るに、特に美なるなら茸を、四つ割にして出だしたり、幸伯これを吸はんと思ひしに、はじめ座につく時、腰にさげたる印籠巾著を、膝の脇にや居しきけん、忽はつしと音しにけり、幸伯ひそかに驚きて、こは印籠をひしぎしならんと思ひつゝ、とりて見るにさせることもなし、こはいかにと疑ひまどひて、やがてその巾著の紐をときつゝ、内を見るに、いぬる年兄道伯がくれたりし、三つ角の银杏くだけたり、そのとき幸伯思ふやう、曩にわが兄の、この银杏をくれしとき、にいへらく、その理あるにあらねども、三つ角なる银杏は毒けしなりとて、むかしより人のいひ傳へたり、よしや醫師なればとて、かゝる事は俗にしたがひて、文盲見義に用ふるぞよき、其方にも一つ懐中せよとくれたるを、この巾著に入れおきしに、今摧けしは不審の事なり、且この吸物は、わが好物といふにもあらず、いかにせましと思ふ心の、とかく心にかゝりしかば、吸はぬにますことあらしものをと、やうやくに思ひとりて、もろ人にうちむかひ、われらけふは大切なる精進日に候へば、御酒ばかりたまはらんとて、盃をうけて少し飲みしが、遂に療用にかこつけて、酒宴なかばに辭し去りぬ、しばらくして彼吸物をくらひし百姓の家より、幸伯がり人を走らして、只今見まひ給はれかしとて、急病用の使、推しつゝ、